

〔第3種郵便物認可〕

世界に平和の種まく

「原爆劇画、単行本に 襲を受け、横田さんの自若者間で静かな支持」。宅は全焼した。ゲンに自1975年3月18日の朝日新聞夕刊社会面に、漫画「はだしのゲン」が単行本になるという4段見出しの記事が掲載された。作者の中沢啓治さんには取材が殺到。「ゲン」は一躍有名になった。

記事を書いた横田喬さん(77)＝横浜市＝は当時、東京社会部の平和担当記者だった。東京都江東区にあった中沢さん宅を訪れ、押し入れに積まれた1年半分の週刊少年ジャンプの「ゲン」を2日かけて読んだ。自然と涙があふれ出たという。故郷・富山市も米軍の空襲を受け、横田さんの自宅は全焼した。ゲンに自分の過去が重なった。押し入れには子どもたちからの手紙も山ほどあった。「子どもがこんな原爆に対して関心があるのに、大人が関心を持たなくてどうするんだ」。そんな思いで記事を書いた。

中沢さんの妻ミサヨさん(70)によると、中沢さんは夢中になってページをめくる横田さんの姿に「あれこそ本物の記者だ」と感服した。



横田喬さん



「はだしのゲン」40年

下

20カ国語翻訳 広がりさらに

と語り、亡くなる間際に「また会いたい」と話していたという。横田さんは照れくさそうに言う。「僕が記事を書かなくてもゲンは広まったと思う。素晴らしい作品だから」

◇ ◇ ゲンは世界に広まっている。「ゲンが英語をしゃべった! あいつ、頑張ってますな」。中沢さん



ロシア語の翻訳を手がけた「プロジェクト・ゲン」代表の浅妻南海江さん。手前はロシア語版「はだしのゲン」＝金沢市長坂で23日、丹下友紀子撮影

ウクライナ人女性と、金沢市の小学生との文通の翻訳を担当していた。原爆について伝えたいと「ゲン」のロシア語訳を始め、2001年に7年

「ゲン」を研究している京都精華大マンガ学部

中沢さんは「10日前に設立された『ひろめる会』にこうメッセージを寄せた。「ゲンは地球上を何百回、何千回もはだしでかけめぐり、戦争と核兵器を無くすためにガンバル決心です」

【中里頭、丹下友紀子、吉村周平】